

令和7年度全国学力・学習状況調査 小田原市の結果について

小田原市教育委員会

目次

1 はじめに

2 調査の概要

- (1) 調査の目的
- (2) 調査の方式
- (3) 調査の実施日および調査の対象
- (4) 調査の内容
- (5) 調査結果の見方
- (6) 本市の基本的な考え

3 教科に関する調査結果

- (1) 令和7年度 各教科の平均正答率一覧
- (2) 教科に関する調査について【小学校】
 - ①直近4回の平均正答率の経年変化
 - ②国語について
 - ③算数について
 - ④理科について
- (3) 教科に関する調査について【中学校】
 - ①直近4回の平均正答率の経年変化
 - ②国語について
 - ③数学について
 - ④理科について

4 質問紙に関する調査結果

- (1) 教育活動の取組状況に関わる項目について
- (2) 教育環境に関わる項目について

1 はじめに

令和7年4月に実施された「令和7年度 全国学力・学習状況調査」の本市の調査結果の概要について報告する。本市の調査結果及び課題等を公表することにより、学校・家庭・地域がより一層の連携をし、本調査から見える児童生徒の学力や学習状況から学習指導の改善に努めていこうと考える。

また、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であることや、学校における教育活動の一側面であることを踏まえ、結果については、序列化や過度な競争につながらないように十分配慮して取り扱う必要がある。したがって、本内容を活用の際にはこの趣旨を十分ご理解いただき、適切な取扱いをされるようお願いする。

2 調査の概要

(1) 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の方式

悉皆調査

参考	・令和4年度	国語、算数・数学、理科
	・令和5年度	国語、算数・数学、英語（中学校のみ）
	・令和6年度	国語、算数・数学
	・令和7年度	国語、算数・数学、理科

(3) 調査の実施日および調査の対象

令和7年4月17日（木）

- ・小学校第6学年（市内25校、1,286名）
- ・中学校第3学年（市内11校、1,227名）

(4) 調査の内容

- ① 教科に関する調査
 - ・小学校・・・国語、算数、理科
 - ・中学校・・・国語、数学、理科
 - * 中学校理科は CBT による解答方式で実施
- ② 質問紙調査
 - ・児童生徒に対する調査
 - ・学校に対する調査
 - * 質問紙調査はオンラインによる回答方式で実施

(5) 本市の基本的な考え

小田原市教育委員会では、「令和7年度全国学力・学習状況調査に関する実施要領」に基づき、本調査の結果について次のような考えを基本としている。

本調査で測定できるのは「学力の特定の一部」であり、地域性や家庭環境等による影響も受けるものと認識しているが、調査問題は、学習指導要領の目標・内容等に基づいて作成されたものであり、その結果は、児童生徒の学力の一側面を示す客観的な資料である。

3 教科に関する調査結果

(1) 令和7年度 各教科の平均正答率一覧

(国語、算数・数学、小学校理科の単位は% 中学校理科はIRTスコア)

*IRT 難易度の異なる問題を解いても正誤パターンから学力を推定できる項目反応理論スコア (500点が平均の目安)

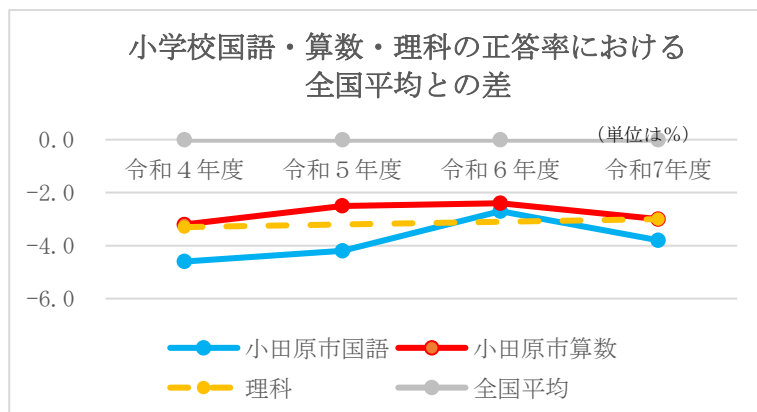
	教科	小田原市	神奈川県	全国
小学校	国語	63	66	66.8
	算数	55	59	58
	理科	54	57	57.1
中学校	国語	53	55	54.3
	数学	48	51	48.3
	理科	499	510	503

※市や県の正答率は整数表示

小田原市の平均正答率は、全教科で「全国平均正答率±10%」の範囲内に含まれており、**全国との大きな差は見られない。**

(2) 小学校の調査結果

直近4回の平均正答率の経年変化



小学校調査では、**平均正答率の±10%の範囲内であり、大きな差は見られない。**

①国語について

言葉についての知識及び技能を問う設問では、「言葉の特徴や使い方に関する事項」「情報の扱い方に関する事項」で令和6年度より全国平均との差が多少開いた。特に今回の調査では「言葉の特徴や使い方に関する事項」の正答率が全国平均正答率と比べて差が大きい。

＜小学校国語「知識及び技能に関する事項」における全国平均正答率との差＞（単位は％）

知識・技能	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
言葉の特徴や使い方に関する事項	-6.8	-3.8	-4.9	-7.3
情報の扱い方に関する事項	—	-0.7	+1.7	-3.1
我が国の言語文化に関する事項	-8.7	—	-2.3	-3.1

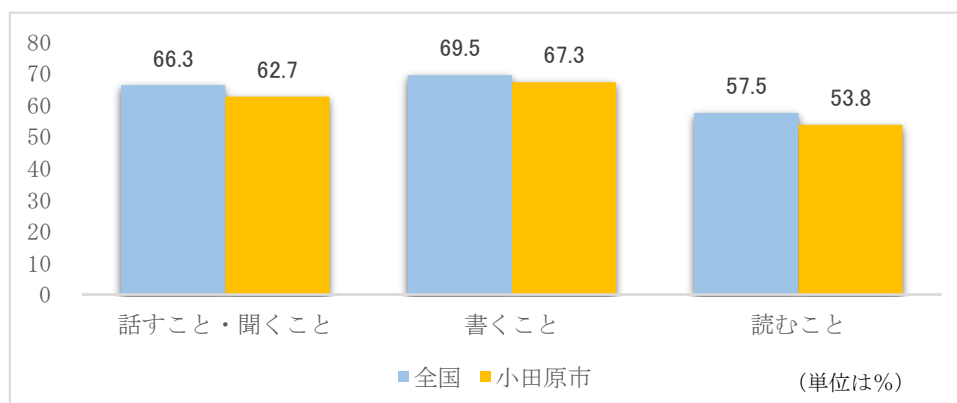
※R5年度まで言語に関して2つの内容事項について調査

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
2四イ	【ちらし】の下線部イを、漢字を使って書き直す (あついで)	学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる	62.8	-9.3

正答である「暑い」以外の同訓の漢字を書くなどの誤りがあったものと考えられる。漢字の意味を確認したり熟語に置き換えたりするなどの取組をするとよい。

学習指導要領の内容の「思考力、判断力、表現力等」の項目のうち、全国平均正答率との差が大きいのは「読むこと」の区分であるが、令和6年度と比べて、差は小さくなっている。

＜小学校国語「思考力、判断力、表現力等に関する事項」における平均正答率＞



「読むこと」の問題では、「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる」問題の正答率が全国平均正答率と比べて差が大きい。

<小学校国語「読むこと」の問題と正答率> (単位は%)

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
3三 (2)	【資料1】を読み返して言葉の変化について自分が納得したことを、【資料2】、【資料3】、【資料4】に書かれていることを理由にしてまとめて書く	目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる	48.9	-7.4

【まとめ】

児童質問紙では、「国語の授業で、目的に応じて説明的な文章を読み、文章と図表を結び付けるなどして必要な情報を見つけていますか」の質問に対し、「よくしている」と回答した児童は24%と低くなっている。国語の学習においては、**複数の資料を結びつけて読む学習活動を設定し、それぞれの関係を考えながら読むことが重要**である。その際、資料にある**語句や情報の結び付きを視覚的に明らかにしながら**、読む指導を行うことが効果的であり、さらにその内容について自分の考えを適切に書いて表現できるように指導するとよい。

②算数について

「図形」「データの活用」の領域では、全国平均正答率との差が広がっている。「数と計算」「変化と関係」の領域では全国平均正答率との差が縮まってきている。

<小学校算数領域別の全国平均正答率との差> (単位は%)

領域	令和5年度	令和6年度	令和7年度
数と計算	-3.9	-3.5	-3.0
図形	-2.5	-2.8	-3.8
測定	—	—	-0.8
変化と関係	-2.2	-1.6	-1.3
データの活用	-3.1	-0.5	-3.6

図形領域の問題において、特に全国平均正答率との差が大きかったのは次の問題である。

<小学校算数「図形」の問題と正答率> (単位は%)

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
2四	五角形の面積を求めるために五角形を二つの図形に分割し、それぞれの図形の面積の求め方を書く	基本図形に分割することができる図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる	30.6	-6.4

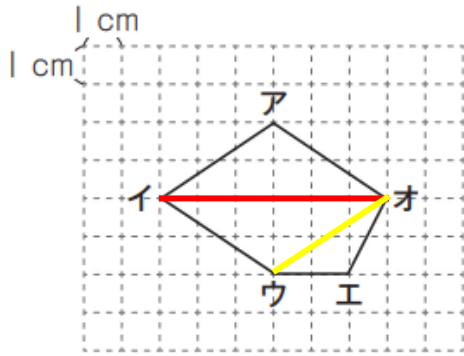


図3

条件

- ・ 直線イオ・直線ウオのいずれかの補助線を引き二つの図形に分ける。
- ・ 分けた図形のそれぞれの面積とその求め方を、式や言葉を使って説明する。
- ・ 記載の公式を使って考えてよい。

解答類型

- ①直線イオで三角形と台形に分けて考えた児童… 7 割弱（正答率約 4 割）
台形の記述に関する誤答の方が多い
- ②直線ウオでひし形と三角形に分けた児童…約 3 割（正答率約 2 割）
三角形の記述に関する誤答の方が多い。
- ①②のいずれかを選択したが、記述できていないまたは無解答の児童…約 5 割

多角形を基本図形に分割して既習の図形を見いだして面積を求める見通しをもつことや面積を求めるために必要な長さなどを捉え、面積の求め方について式や言葉を用いて表し、説明する活動を行うとよい。

全国的にも 2 割強と正答率が低かった問題は「数と計算」領域の次の問題である。小田原市でも約 2 割の正答率であった。また、全国・小田原ともに無解答率が高い。

<小学校算数「数と計算」の問題と正答率>（単位は%）

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
3 二	$3/4 + 2/3$ について、共通する単位分数と、 $3/4$ と $2/3$ が、共通する単位分数の幾つ分になるかを書く	分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述できるかどうかをみる	19.0	-4.0

(2) ひろとさんたちは、分数のたし算についても、小数で考えたようにふり返っています。

まず、みおりさんは、 $\frac{2}{5} + \frac{1}{5}$ についてまとめています。



$\frac{2}{5}$ は $\frac{1}{5}$ の 2 個分、 $\frac{1}{5}$ は $\frac{1}{5}$ の 1 個分です。
 $\frac{2}{5} + \frac{1}{5}$ の計算は、 $\frac{1}{5}$ をもとにすると、 $2 + 1$ を使って考えることができます。

$\frac{2}{5} + \frac{1}{5}$ は、もとにする数を $\frac{1}{5}$ にすると、整数のたし算を使って計算することができます。

通分の説明は 3 割の児童がしているが、共通する単位分数が $1/12$ であり、それぞれがそのいくつかを記述できている児童は 25% 程である。みおりさんの説明が $3/4$ と $2/3$ の共通する単位分数はいくつかとそれぞれの数はその単位分数のいくつかのヒントになっていることに気づけなかったことが考えられる。

【まとめ】

算数の学習では、問題で分かっていることを図に表し、数や図をかき加えていくことで、問題場面の数量の関係を自ら捉えることができるようにすること、既習の内容に帰着させることが重要である。計算問題では、その子の理解度に合わせてより多くの問題を解くことに加え、問題を解く過程を数や言葉を用いて記述できるようにすることも重要である。



③理科について

調査した「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」のそれぞれを柱とした領域のうち、全国平均正答率との差が大きかったのは「生命」を柱とした領域である。受粉についての知識を身に付けることに課題があった。また、「エネルギー」を柱とした領域において、電気を通す物と磁石に引き付けられる物に関する知識を身に付けることに課題があった。

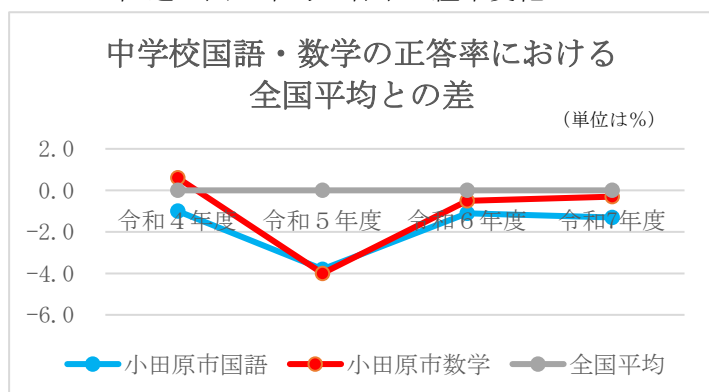
【まとめ】

理科では、科学的な言葉を使用して表現することが重要である。また、観察や実験の結果や結論を、図に整理したり言葉で説明したりするなど、知識と関連付けて理解を深めることが大切である。



(3) 中学校の調査結果

直近4回の平均正答率の経年変化



令和7年度中学校理科IRTスコア	
小田原市	全国
499	503

中学校調査では、各教科で**全国平均との差が縮まったことに加え、平均正答率の±10%の範囲内であり、大きな差は見られない。**

①国語について

昨年度は思考力、判断力、表現力等の「B書くこと」について全国平均との差は、0であったが、本年度-2.8ポイントと差が一番大きかった。知識及び技能の「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」については昨年度課題として挙げていたが、-2.2ポイントと差が縮んでいる。

<中学校国語 区分別の全国平均正答率との差> (単位は%)

分類		区分	小田原市正答率	全国との差
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	45.9	-2.2
		(2) 情報の扱い方に関する事項	—	—
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	—	—
	思考力、判断力、表現力等	A 話すこと・聞くこと	52.5	-0.7
		B 書くこと	50.0	-2.8
		C 読むこと	61.6	-0.7

<中学校国語「B書くこと」の問題と正答率> (単位は%)

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市正答率	全国との差
4一	手紙の下書きを見直し、誤って書かれている漢字を見付けて修正する	読み手の立場に立って、表記を確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる	49.8	-7.5

4二	手紙の下書きを見直し、修正した方がよい部分を見つけて修正し、修正した方がよいと考えた理由を書く	読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる	29.0	-1.1
----	---	---	------	------

4一は出題の趣旨にある通り「書くこと」の問題であるが、「せんもん」の正しい字を理解していなければ修正することができない。解答累計では無解答が38.3%と高く、この誤りに気付くことができなかつた割合も合わせると約5割になる。

4二は正答率が5割を切っている問題である。これは記述で解答する問題であるが、無解答率も高い。調査全体を見ても、記述で解答する問題は正答率が低い。

<中学校国語「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」の問題と正答率> (単位は%)

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
1一	変換した漢字として適切なものを選択する(かいしん)	文脈に即して漢字を正しく使うことができるかどうかをみる	34.7	-0.5

1の「かいしん」は、三つの選択肢から選ぶ問題である。どの選択肢にも3割の生徒が解答している。それぞれの「かいしん」や「会心の出来」の意味を正しく理解できていなかったことが考えられる。

【まとめ】

漢字の指導においては、**文脈に即して漢字を読んだり書いたりすることができるよう指導**することが大切である。自分の考えがよく伝わる文章を書くには、書いた文章を見直し、間違いや言葉遣いを修正して完成度を高めるとともに、複数回の推敲を通じて、論理的で説得力のある表現を作り出すことができるよう指導することが重要である。

②数学について

昨年度、「図形」の領域では、正答率が4割に満たなかったが今年度は45%まで伸び、全国との差が縮まっている。「データの活用」は全領域の中で一番正答率が高いが、全国との差が一番大きくなっている。

<中学校 数学領域別の全国平均正答率との差> (単位は%)

領 域	小田原市	全国との差
数と式	44.0	+0.5
図形	45.4	-1.1
関数	48.6	+0.4
データの活用	55.8	-2.8

「データの活用」の問題で、全国平均正答率との差が一番大きいのは次の問題である。
 <中学校数学「データの活用」の問題と正答率> (単位は%)

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
5	ある学級の生徒40人のハンドボール投げの記録をまとめた度数分布表から、20m以上25m未満の階級の相対度数を求める	相対度数の意味を理解しているかどうかをみる	37.7	-4.8

ハンドボール投げの記録

階級(m)	度数(人)
以上 未満	
5 ~ 10	3
10 ~ 15	8
15 ~ 20	9
20 ~ 25	10
25 ~ 30	6
30 ~ 35	3
35 ~ 40	1
合計	40

解答類型	
<input checked="" type="radio"/>	ア 相対度数を解答
<input type="radio"/>	イ 度数を解答
<input type="radio"/>	ウ 累積度数を解答
<input type="radio"/>	エ その他
<input type="radio"/>	オ 無回答

解答類型を見ると、相対度数の意味や求め方を正しく理解できていた生徒は約4割である。

問題別にみると、正答率が低いのが「数と式」の問題である。これは構想を立てて説明し、統合的・発展的に考察することができるかどうかを見る問題である。

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
6 (2)	$3n$ と $3n+3$ の和を $2(3n+1)+1$ と表した式から、連続する二つの3の倍数の和がどんな数であることを説明する	式の意味を読み取り、成り立つ事柄を見だし、数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる	25.3	-0.4

(2) 連続する二つの3の倍数の和は、9の倍数になるとは限らないことに気づいた二人は、連続する二つの3の倍数の和がどんな数になるかを調べることにしました。

そこで、二人は、 n を整数として、連続する二つの3の倍数を $3n$ 、 $3n+3$ と表してそれらの和を計算し、それぞれ次のように式を変形しました。

結菜さんの式の変形

$$\begin{aligned} &3n+(3n+3) \\ &=3n+3n+3 \\ &=6n+3 \\ &=3(2n+1) \end{aligned}$$

太一さんの式の変形

$$\begin{aligned} &3n+(3n+3) \\ &=3n+3n+3 \\ &=6n+3 \\ &=2(3n+1)+1 \end{aligned}$$

結菜さんの式の変形の $3(2n+1)$ から、「連続する二つの3の倍数の和は、3の倍数である」ことがわかります。

太一さんの式の変形の $2(3n+1)+1$ から、連続する二つの3の倍数の和は、どんな数であるといえますか。「 は、 である。」という形で書きなさい。

正答の条件

「AはBである」と記述しているもの

- A 連続した二つの3の倍数の和
- B 奇数

Bについて2の倍数や3の倍数と解答した誤答パターンがある。文字式 $2(3n+1)+1$ を2の倍数+1、つまり奇数という結論を見いだせるようにすることが大切である。

全国平均正答率との差が一番大きかったのも「数と式」の問題である。これは文字を用いて数量の関係や法則などを考察する場面において、事象に即して解釈したことを数学的に表現することや数量を文字を用いた式で表すことができるかを見る問題である。

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
2	果汁40%の飲み物 a mL に含まれる果汁の量を、a を用いた式で表す	数量を文字を用いた式で表すことができるかどうかをみる	46.2	-5.7

解答類型

- ア 0.4a
- イ 4a
- ウ 割り算の式または分数で表す
- エ アイウ以外
- オ 無回答

解答類型から、 $40\% = 0.4$ や (飲み物の量) \times (果汁の割合) = (果汁の量) の学び直しが必要と考えられる。その上で、数量を文字を用いた式で表すことに課題があると考えられる。

【まとめ】

データの活用問題では、「相対度数」の意味の理解に課題があると考えられる。データの特徴を読み取る活動を通して相対度数の必要性和意味を理解できるように指導することが大切である。文字式においては、文字を用いた式の意味を読み取り事柄の特徴を数学的に説明できるように指導することが大切である。学校質問紙では、「数学の授業において問題の答えを求めさせるだけではなく、どのように考えその答えになったのかなどについて、筋道を立てて説明させるような授業を行ったか」という質問項目に「よく行った」と回答した学校の本市の割合は非常に高い。解答の過程や事柄の特徴を**数学的に説明できるような授業展開のさらなる工夫**が必要である。

③理科について

令和7年度の実施において結果はIRTに基づいており、500を基準とするIRTスコアで表示されている。出題問題については、全校共通の問題と実施日ごとの問題がある。

全校共通の問題において全国平均正答率との差が大きかったのは「粒子」を柱とする領域の問題である。また、本市の平均正答率が1番低かったのは「生物」を柱とする領域の問題である。どちらも「水をテーマに科学的に探究する」問題である。日常生活や社会と関連付けながら事象を多面的、総合的にとらえ、理科の見方・考え方を働かせて既習の知識及び技能を活用する力に課題が見られた。

【まとめ】

理科では、身のまわりの事象から生じた疑問や問題が解決可能かどうかに着目し、自分の言葉で表現する学習場面を設定することが考えられる。生物の観察場面では、共通点や相違点を挙げ、知識をもとに生命の維持に関する働きを身につけることが大切である。

4 質問紙に関する調査結果

質問紙調査については、(1) 教育活動の取組状況に関わる項目について(2) 教育環境に関わる項目についての2点で整理をしていく。これらの項目についてできるだけ肯定的な回答をする児童生徒を増やしていくことが、学力の向上にもつながると考える。

(1) 教育活動の取組状況に関わる項目について

【項目1】「国語の授業内容がよく分かる」

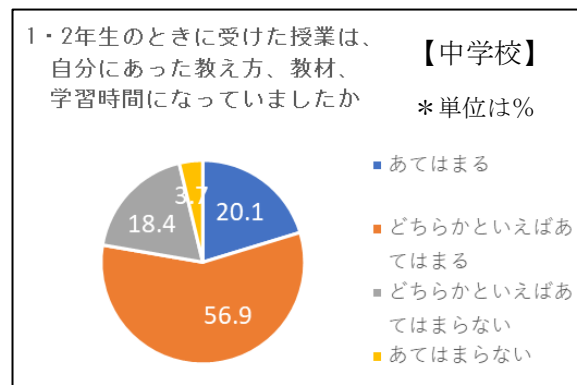
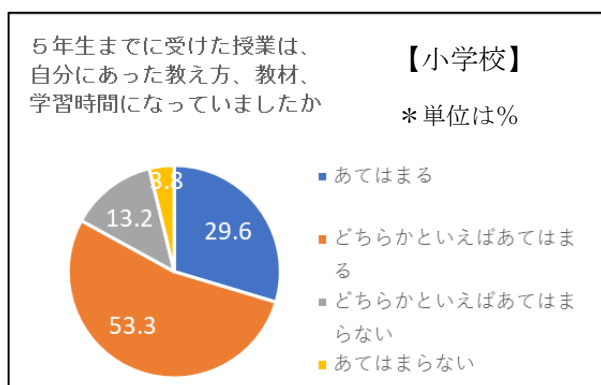
【項目2】「算数・数学の授業内容がよく分かる」



※小学校、中学校ともに「国語（算数・数学）の授業内容はよく分かりますか」という質問事項で「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答をした児童生徒の割合

		小田原市	全国
小学校	国語	81.3%	82.8%
	算数	75.9%	78.3%
中学校	国語	79.0%	77.0%
	数学	73.4%	70.3%

【項目3】「前の学年までに受けた授業は、自分に合った教え方、教材、学習時間などになっていた」



国語、算数・数学ともに、授業の内容がよく分かると回答した割合は、昨年度と比較して全国的にも減少しており、小田原市は令和3年度に設定した目標値（国語90%、算数・数学89%）に届いていない。児童生徒が、自分の理解を確かめながら学習を進めていくことは、学習内容の定着につながっていく。**理解の度合やスピードは一人ひとり異なるため、教え方、教材、学習時間の設定について、それぞれが最適であると感じられるように個に応じた指導を引き続き工夫していく必要がある。**

【項目4】「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」

※小学校、中学校ともに「前学年までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という質問事項で「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答した児童生徒の割合

	小田原市	全国
小学校	75.0%	80.3%
中学校	76.7%	77.7%

課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組もうとする児童生徒の割合は全国平均をやや下回る結果であった。肯定的な回答をした児童生徒ほど各教科の平均正答率が高い傾向であることが明らかになっており、主体的に課題に取り組むことは大変重要である。また、ウェルビーイングに関する回答との相関もあることが分かっている。中学校の回答率が小学校を上回り、本市で進めている STEAM 教育のような、自ら課題を設定し解決に向けて取り組む活動の効果が表れてきたと考えられる。今後も、与えられた課題に取り組むだけでなく、**児童生徒一人ひとりが興味関心を高めて問いをもち、その解決に向けて知識や技能を活用し、学びを深めていくことが大切である。**

【項目 5】「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考えに気付いたりすることができている」

※「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考えに気付いたりすることができていますか」という質問事項に対し、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的に回答した児童生徒の割合

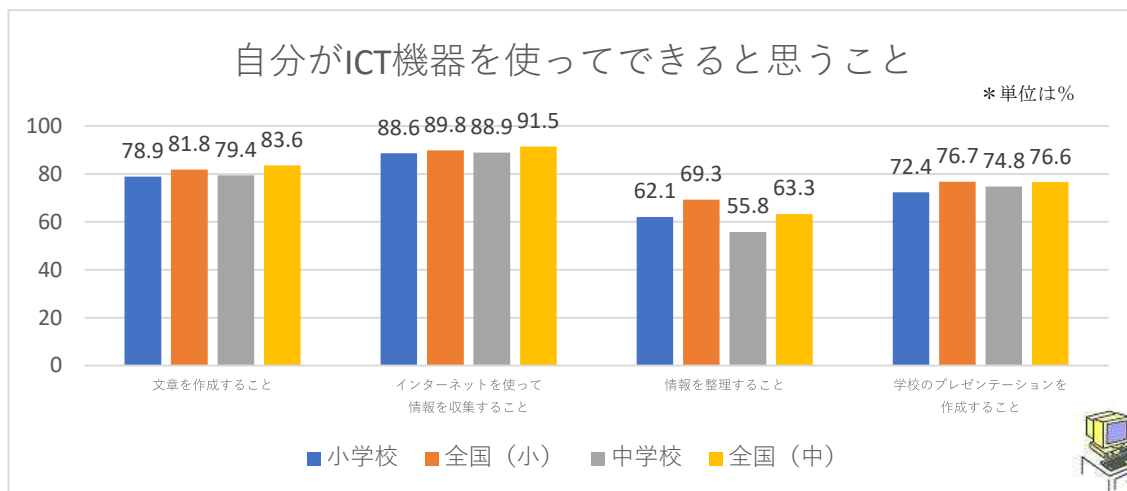
	小田原市	全国
小学校	84.0%	84.9%
中学校	85.1%	84.7%

主体的・対話的で深い学びの実現に向け、各学校で授業研究などの取組が行われているが、児童生徒自身も、学習活動の中で行う対話の良さを実感していると考えられる。中学校では全国を上回る回答になった。**友達や他の生徒の思いや考えと出会うことによって、自分の考えが変わったり、新たなものを生み出したりといった経験をさらに積み重ねられるようにしていくことが望まれる。**そのためにも、温かく互いを認め合う学習集団の形成が不可欠である。



(2) 教育環境に関わる項目について

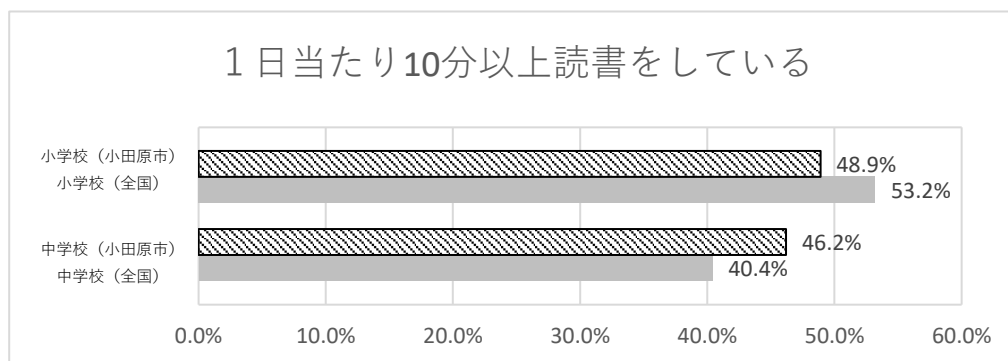
【項目1】「あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器でできることについて次のことにどれくらいあてはまりますか」



ICT機器を活用できると考えている児童生徒ほど、各教科の正答率が高い傾向があることが文部科学省の今年度のクロス集計で分かっている。また、ICT機器活用に自信がある児童生徒ほど、探究的な学びに取り組んだと回答している傾向もあり、ICTの活用が探究的な学習において有効であることが分かる。同じくICT機器活用に自信がある児童生徒ほど各教科における学びの充実や自分にはよいところがあると回答している傾向がある。「情報を整理すること」について全国平均との差が開きがあるため、課題の解決に取り組む学習活動や発表・表現する活動の中で、検索や情報の選択場面を作り、力をつけていくとよい。

【項目2】「1日当たりどのくらいの時間、読書をするか」

※「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどのくらいの時間、読書をするか（電子書籍も読書に含む。教科書や参考書、漫画や雑誌を除く）」という質問事項に対し、10分以上と回答した児童生徒の割合



中学校において全国の回答率を上回ったが、全体としては割合は少なくなっている。日常的に本に親しむことは、様々な世界や考え方に触れることにつながる。さらに国語の調査結果から課題として見えた国語の書く力や読む力などをはじめ、他教科も含めた学力の向上にもつながる。電子書籍も含め、児童生徒が進んで本に親しめるよう、様々な読書環境を整えたり、声かけをしたりして工夫していくことが引き続き重要である。